

本居宣長の哲学的思考と仏教教養

——新しい宣長像の構築を目指して——

【抄録】

従来本居宣長は仏教批判者とされ、多くの宣長研究において仏教思想は領域外に置かれてきた。だが『古事記伝』に見て取れる心と事と言語は一体不可分とする哲学的思考は、漢学・儒学にはなく元来仏教にあるものである。宣長は熱心な浄土宗徒の家に生まれ早くから仏教知識を身に付けた。二三歳で医学修行のために京都に遊学し漢学・儒学とともに歌学を学んで、中世歌人が拠り所にした『摩訶止観』から仏教の哲学的思考を会得し、松坂帰郷直後に執筆した歌論『排蘆小船』に活かした。やがて歌論から『古事記伝』へと発展させてその哲学的思考を『古事記』注釈の基礎に据えた。宣長の学問は仏教思想と深く関わっているのである。

キーワード：「意と事と言」、「相称ふ」、「中世歌論」、「摩訶止観」、「五陰・十二入・十八界」

はじめに

本居宣長の『古事記伝』第一巻に「意と事と言とは相称へる物」という言葉がある。「相称ふ」とは「相応」と同義で、程よく釣り合うという意味の一般的用法とは異なり、次のように離れがたく和合するという意味の仏教語に由来すると考えられる⁽¹⁾。

問、相応とは、是れ何の義なりや。答、等しき義、・・・等しくして離れざる義、・・・等しく和合するの義、是れ相応の義なり。

函と蓋と相ひ称ふが如し。
(『阿毘達磨大毘婆沙論』卷十六)⁽²⁾
(同 卷五十)⁽³⁾

したがって宣長の言葉は、心と事と言語は一体不可分の関係にあると解釈できる。同じ言葉が真言僧の契沖にある。「このころとこととはとあひかなふ」、「言即、心也」、「有レ事必、有レ言。有レ言必、有レ事」である⁽⁴⁾。契沖の、心と言語、事と言語は一体とする考え方は元々仏教にあるものであり、宣長は契沖からそれを学んだ⁽⁵⁾。また心と事の関係につ

清田政秋

いては後述のように『摩訶止観』に「心はこれ一切の法、一切の法はこれ心なるなり」という言葉がある。このように仏敎には心と事と言語の關係についての哲学的思考がある。

本稿は従来反仏敎の人とされ、その学問は仏敎とは無縁のものとしてきた宣長像に対し、宣長における哲学的思考と仏敎敎養の関連性を考察して、心と事と言語は一体の關係にあるというのはいかなることかを明らかにする中で、新しい宣長像の構築を目指すものである。

一・宣長青少年期の仏書知識

熱心な浄土敎徒の家に生まれ育った宣長は若い頃から仏書をよく読んだ。青少年期の仏書知識を知ることのできる三つの稿本がある。十六歳から二八歳までに記された書名のみを記す『経籍』、十七、八歳頃に記された諸書からの抄出集『事彙覚書』、十七歳から二二歳頃までに記された京都に関するあらゆる事項を諸書から抜書した『都考抜書』である。右の三稿本には筆者の調査によれば重複を除き八二〇余の仏書が記載され、それらの分析によって宣長青少年期の仏書知識を知ることができる。まず『経籍』は、宣長が知り得た漢学・儒学・仏教・国学・歌学・神道・医学・本草学等、ありとあらゆる領域の三五〇〇余の書名だけを記すものである。宣長が三五〇〇余の書すべてを実際に手にしたわけではなく、限られた書から関連する書名を知ったものと思われる。⁽⁷⁾『経籍』冒頭に「凡例」があり、神・儒・仏・歌等内容の別、和・漢の別、世に広く知られる・知られないの別等を記載

する旨を記している。だが内容別に書名が並んでいるわけではなく、三五〇〇余書の内、筆者の調査では仏書が七四五ある。この七四五の仏書を『仏書解説大辞典』等によって調査し整理・区分すると以下のようになる。

経…一五三 律…十三 論…十二
 中国仏書…一八九 中国の僧伝…七 朝鮮仏書…四
 日本仏書…二〇五 日本の僧伝…九〇 日本の寺院縁起…三六
 仏書でないもの…四 不詳(検索不可)…三三一 合計七四五

この七四五点をその内容面について検討すると、まず一五三点の経については、大正蔵の阿含部と本縁部に属する経が三二点で経全体の二〇%あり、宣長の初期仏敎への関心の高さが窺われる。続いて経・律・論を除く仏書については以下の三点が特徴として挙げられる。一点目は経録あるいは一切経目録といわれる書が載ることである。『出三蔵記集』『歴代三宝記』『開元釈敎録』『統開元録』『静泰録』『衆經目録』『大唐内典録』『統大唐内典録』『貞元録』『統貞元録』等である。「経録」には、経名、卷数、訳者と訳時、単訳・重訳の別、有本・欠本の別、真経・偽経の別、全訳・抄訳の別、大小乗または経律論のいずれに属するか等の種々の情報が盛り込まれている。これらの書の内、宣長が実際に手に取って見た書がどの程度あったかは不明であるが、宣長は一切経とはどのようなものか、どのように区分されるものかについておおよその知識を持っていたと考えられる。

二点目は仏敎史への関心である。中国の『梁高僧伝』『唐高僧伝』『宋高僧伝』『大明高僧伝』『浄土高僧伝』『六学僧伝』等中国の僧伝、

中国天台宗の立場からの仏教史である『仏祖統紀』、また『扶桑略記』や『元亨釈書』等の日本仏教史、『東国高僧伝』、『法然伝』等日本の僧伝や寺院縁起が挙げられる。日本の僧伝九〇点の中で禅僧の伝記が五一、その大半は臨済宗である。何等かの臨済宗に関する書を読んだことが分る。また『都考拔書』には『元亨釈書』からの長い抄出があり、その頃から『元亨釈書』をよく読んだことが知られる。

三点目は仏教語辞典、仏教百科全書、仏教総論が載ることである。『翻訳名義集』『釈氏要覧』『三藏法数』『法苑珠林』『諸経要集』、また慧遠の『大乘義章』や吉蔵の『大乘玄論』等の著名な仏教総論、また日本天台宗を中心とした仏教の教理を解説した『西谷名目』等である。『翻訳名義集』『釈氏要覧』『三藏法数』の三書は、仏教学を学ぶ者に古来愛用されてきたいわゆる「仏学三書」であり、この三書を読めば仏教の全体が分るとされる。宣長の蔵書目録には三書のうち、『翻訳名義集』と『釈氏要覧』があり、特に若い頃から中国宋代の梵語辞書である『翻訳名義集』をよく読んだ。

以上三点から見て宣長は、仏教とはどのようなものであり、仏典・仏書にはどのようなものがあるか、仏教はどのような歴史を辿ってきたかについて、おおよその理解・把握ができていたことが了解される。

次に宗派別に見ると、浄土教系の書が一〇〇点、善導の書を始め法然、親鸞、その門下の書である。次に多いのは法然がそこから出た天台宗系で五五点、智顛の『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の天台三大部、『摩訶止観』を注釈する湛然の『止観輔行伝弘決』、高麗・諦

観の『天台四教義』をはじめとした中国天台の書とともに、日本の天台宗に関する書が多く挙げられる。浄土教への関心は自らの家の宗教であるから当然であるが、天台宗への関心は宣長において重要である。

一方、『事彙覚書』と『都考拔書』に載る仏書は重複を除き一二九点である。この一二九点と『経籍』に載る書を合せると、重複を除き八二二点である。『経籍』はただ書名のみを記すものであるのに対して、『事彙覚書』と『都考拔書』は諸書からの抄出である。『事彙覚書』は事物の名称を集めて説明するものであり、関心を持つ多くの事項について諸書から抄出している。この中で天台宗への関心が目立ち、『摩訶止観』に関連する引用が三ヶ所ある。

常行堂ハ、止観ノ二卷ヨリ出タル法花ノ四種三昧ノ中ノ常行三昧ヲ行堂也、
(宣長全集別巻一、三〇五頁)

文字法師ハ、教相ヲ習ヒテ坐禅ヲシラズ、暗證 禅師ハ、タゞ坐禅工夫ヲモツハラトシテ教相ニクラシ、止観第五二、暗證禅師誦文ノ法師ト有、是也、
(同三三四頁)

天台家ニ六即ノ位階ト云事アリ、迷倒ノ凡夫ヨリ仏果ノ頂上マデヲ、タゞ六段ニテフミノボラシメタル階級ナリ、六即トハ、理即、名字即、観行即、相似即、分真即、究竟即コレ也、
(同三三四頁)

また『都考拔書』では「一心三観ノ妙理、玉ヲミガクガ如シ」と記すが、これは『法然上人絵伝』からの引用である。⁽⁸⁾「四種三昧」「文字法師」「六即」「一心三観」は『摩訶止観』の重要語であり、宣長が少

年時より親しんだ『徒然草』にも『摩訶止観』の引用があつて、この頃の宣長にとつて『摩訶止観』は関心ある仏書の一つであつた。

このように『経籍』『事彙覚書』『都考抜書』は、宣長が漢学・儒学・国学等の分野とともに仏教に非常に幅広い関心を持つていたことを示し、後年の学問形成の一つの基盤になつた。特に注目されることは天台宗への関心であり、中でも『摩訶止観』への着目である。『経籍』の自筆稿本の表紙裏に京都遊学時代に宣長が重要仏書と認識したと思われる二九の書が記載される。その二九の書の中に『摩訶止観』があり、宣長が『摩訶止観』の重要性を理解していたことを示す。

二・宣長と『摩訶止観』

宣長は一八歳頃から歌学に関心を持つていたが、二三歳から五年半に亘る京都時代に本格的に歌学を学んだ。その頃記した『本居宣長隨筆』には、太宰春台『独語』からの長い抄出がありその中に次の言葉がある。「俊成卿天台ノ仏法ヲ学ヒテ、一心三観ノ理ヲ歌道ノ極意トセラレタリ」である。つまり春台は『独語』で和歌史を論じる中で、藤原俊成は『摩訶止観』の一心三観の理を歌道の極意としたと言つのである。平安貴族が『摩訶止観』をよく学んだことは、碓慈弘『日本仏教の開展とその基調』上巻（三省堂・一九四八）がつとに明らかにしており、藤原道長が当時の名高い天台僧から『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の「天台三大部」の講義を受けたこと、また藤原行成や九条兼実も学僧たちから『摩訶止観』を学んだこと、全体として

平安貴族の天台教学に関する教養が深く広がつたことを指摘する。道長の玄孫である俊成は『摩訶止観』がそのように受容され、その知識が平安貴族社会に流布してゐた中で活躍した人物であり、歌論『古来風体抄』の中で『摩訶止観』について次のように語る。

かの天台止観と申す文のはじめのことばに、「止観の明静なること、前代も未だ聞かず」と章安大師と申す人の書き給へるが、
 ・・・かの止観にも、まづ仏の法を伝へ給へる次第をあかして、法の道の伝はれることを人に知らしめ給へるものなり。・・・
 今、歌の深き道を申すも、空・仮・中の三諦に似たるによりて、通はして記し申すなり。

（『歌論集』（小学館・一九七五）二七四―二七五頁）

俊成は『摩訶止観』に学びながら歌と歌論の創作活動に生き、六三歳で出家して釈阿と名のつた。定家も『摩訶止観』を写し、その注釈書である湛然の『止観輔行伝弘決』の書写も始めたことが『明月記』に載る。⁹⁾俊成・定家父子には『摩訶止観』は歌作・歌論の拠り所であつた。近代になつて俊成における『摩訶止観』の重要性を最初に指摘したのは歌人・国文学者の窪田空穂である。空穂は「藤原俊成の歌学」（窪田空穂全集第十卷所収・角川書店）の中で次のように言う。
 大乘仏教の教義よりいふと、宇宙空間の森羅万象は、人間の立場から言ふと人がそれを認めるが故に存在するのであつて、認めなければ無いものである。これはいはゆる三界唯識といふことで、それが根本なのである。・・・花紅葉の色香といふのは、その物である共に、人の心その物でもあつて、その間に差別はなく、本

来一体なのである。……俊成の歌学にあつては、心は即ち物であり、同時に物は即ち心であつて、いはゆる物心一如である（同書一三六頁）。

この空穂の指摘は宣長の学問を理解する上で重要である。宣長は上京直後から歌集や歌論を買い求め、上京二年目に俊成の『古来風体抄』を購入した。既述の太宰春台の言葉にあるように、『古来風体抄』から『摩訶止観』の重要性を知つたと考えられる。後年『本居宣長隨筆』において「天台法門」という項目で、「三諦」「一心三觀」「一念三千」「十乘觀法」等について抄出する。何れも『摩訶止観』の重要思想であるが、「十乘觀法」の中で最も重要なのが「不思議の境を觀ずる」ことであり、その中心となるのが「陰入界の境を觀ずる」ことと、すなわち心を觀ずることである。⁽¹⁰⁾ 宣長が『摩訶止観』から一念三千と十乘觀法の考え方を抄出していることは、宣長は陰入界の境を觀ずる思想をも理解していたことを示す。『摩訶止観』の中でそれは次のように語られる。

陰入界の境を觀ずとは、五陰・十二入・十八界をいうなり。……五陰は同時なり。……もし華嚴に「心は工みなる画師が種々の五陰を画くがごとし」というによらば、界内・界外の一切世間のなかに、心によつて造らざるはなし。……界内外の一切の陰入はみな心に由つて起る。……心はこれ惑の本なり。……ただ識陰を觀ずべし。識陰とは心これなり。……それ一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具して、百法界なり。一界に三十種の世間を具し、百法界はすなわち三千の世間を具し、こ

の三千は一念の心に在り。……心はこれ一切の法、一切の法はこれ心なるなり。（岩波文庫『摩訶止観』上・二七六―二八六頁）すなわち『摩訶止観』によれば、心と対象世界の關係は、心が先に存在してその心が世界を認識するのではなく、知覚器官（六根）と対象世界（六境）との結合によつて心（六識）が生じ、認識世界が成立する。ここから心と対象世界は一体、つまり「心はこれ一切の法、一切の法はこれ心なるなり」とされる。これは引用文にあるように『華嚴經』にもある思想である。したがつて心は最初から対象世界と關係づけられており、独立した実体ではない。「陰入界の境とは、五陰・十二入・十八界をいうなり」とはそのことを言う。「五陰は同時なり」とは、外境と、心即ち六識と、受・想・行の心の作用とは相応して同時に生起することである。想とは感受したものを表象することであり、それは言葉によつてなされる。唯識派によれば心の作用としての想は意識と相応して言葉を起す働きがある。したがつて心が対象世界や言葉の以前にあつてそれを言葉によつて表現するのではなく、心と対象世界と言葉は同時に發生する。

このような『摩訶止観』の思想の影響は、京都遊学から帰つてすぐに執筆された『排蘆小船』における宣長の、心とはいかなるものかについての思索に現れている。中世歌論以来、作歌において心が先か詞が先かの議論があり、心を先にする、あるいは心と詞ともに求めるという考え方が優勢であつた中で、宣長は「和歌ハ言辞ノ道也、心ニ思フ事ヲ、ホドヨクイヒツヅクル道也、……思フ心アリテ後ウタヲヨム也、サレハモトムル所ハ辞ヲト、ノフルニアリ」と言い、心は自然

にあるものであり、求めものは詞である明確に主張した。それは宣長の独創的見解だとされる。歌は「思フ心」を詠むものであるが、心は揺れ動くものである。『摩訶止観』は心について次のように言う。

心は孤り生ぜず、必ず縁に託して起る。意根はこれ因、法塵はこれ縁、所起の心はこれ所生の法なり。……まさに心を戒・定・智慧に専らにすべし。……心起ると謂うも、起るに自性なく、

云々 (『摩訶止観』上・五五〜五六頁)

宣長は、『排蘆小船』で「詠歌ノ第一義ハ、心ヲシツメテ妄念ヲヤムルニアリ」とし、揺れ動く心を鎮めるには歌の題などに心を付けて心を鎮めて三昧に入るようにし、その中で言葉について少しの手掛かりができれば、それについて思索していくと自ずから心は定まると言う。つまり動揺止まない心のままに歌おうとしても歌にならず、歌は言葉を得ることによって動揺を克服する。心は事物に触れて揺れ動くが、動揺止まない心に形を与えるのが言葉だと捉えるのである。この宣長の考え方は『摩訶止観』の「心は孤り生ぜず、必ず縁に託して起る」、つまり「心起るに自性なし」という仏敎思想を基本に置くものだと考えられる。その揺れ動く心についての考え方を、宣長は『排蘆小船』の数年後『紫文要領』と『石上私淑言』の中で「物のあはれ」の論として展開する。両著の「物のあはれを知る」説は、俊成の「恣せず人は心もなからまし物のあはれもこれよりぞ知る」(『長秋詠藻』)の歌がきっかけとなった⁽¹¹⁾。したがって俊成の歌及び歌論は、「物のあはれを知る」説を理解する上で極めて重要である。

ところで宣長が「見る物さく事なすわざにふれて、情の深く感ず

る」(『石上私淑言』)と言うように、心が捉えた事物はある感情を引き起こし、歌はそれを表現する。ここで事物の存在と感情の関係について、和辻哲郎『原始仏敎の実践哲学』(和辻哲郎全集第五卷・岩波書店)の考え方が参考になる。和辻は、仏敎において「真に哲學的問題たり得るのは、無我、五蘊、縁起等において取り扱われた問題に他ならぬ」とし、五蘊の考察の中で「存在するものは感覺的直觀的なるもの」であり、「美しいという花の存在の仕方とその花を美しく感ずる体験とは一つである。これを抽象的に引き離して客觀的と主觀的に分かつたとき初めて心理的存在物としての感情が考えられる」と言う。この和辻の考え方は『摩訶止観』の思想とその影響を受ける俊成と宣長の思想を理解する上で重要である。事物が美しくあるのは、客觀的にそうあるのではなく、また人が主觀的に感じるのでもなく、物の美の存在とそれを感じる心は一つである。つまり対象事物のあり様と心のあり様は一体なのである。また俊成は歌の詞と心の関係について『古来風体抄』の冒頭部で次のように言う。

かの古今集の序にいへるがごとく、人の心を種としてよろづの言の葉となりければ、春の花をたづね、秋の紅葉を見て、歌といふものなからましかば、色をも香をも知る人もなく、なにをか
は本の心とすべき。 (『歌論集』小学館・二七三頁)

つまり俊成は、「よろづの言の葉」がなければ種としての「人の心」もなく、「人の心」と「よろづの言の葉」は相応することを強調する。藤平春男氏によれば、この心と詞の相応の考え方は俊成独自の見解とみなければならぬとされる⁽¹²⁾。

また定家に歌を学んだ順徳院の歌論に次の言葉がある。

歌をよむ事は心のおこるところなり。．．．歌を心うることは、よむよりは大事也。．．．歌をみしり心うる事、この道の至極なり。．．．歌はたゞ詮ずる所、ふるき詞によりて、その心をつくるべし。．．．たゞ歌といふ物は心を本とすべきなり。

〔八雲御抄〕卷第六⁽¹³⁾

「ふるき詞によりて、その心をつくる」とは、宣長の歌論によく似た考え方である。宣長は俊成、定家、順徳院、頼阿等、中世歌人たちの歌論の伝統を継承し、また彼等が親しんだ『摩訶止観』に学び、歌とは何かについて思索して『排蘆小船』『紫文要領』『石上私淑言』の三者で歌論・物語論を展開した。『八雲御抄』にあるように、宣長にとっても「歌をよむ事は心のおこるところ」であり、歌を作る過程で心が作られ、歌を作ることによって日本の心と詞の伝統に繋がった。

『古今集』仮名序は、歌は「心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり」と言う。これによれば歌は心を詞によって表現するものであり、その表現は見聞きする事物に託してなされるから、歌においては心と事と詞の関係が重要である。したがって宣長にとつて歌の世界は、心と事と言語の関係はいかにあるかという問いを生み、それについて思索する場でもあったのではないかと考えられる。そして宣長は、『排蘆小船』『紫文要領』『石上私淑言』における主に心と言葉の関係の考察から、心を惹き起こす元となる事を加えて、『古事記伝』の心と事と言語の関係の考察へと進んだのである。

『摩訶止観』の、心は世界そのものという思想は、既に見たように

『華嚴経』の「三界唯心」の考え方に通じるものである。したがって宣長の考え方には「三界唯心・万法唯識」の思想も与ったと考えられる。その思想は鎌倉時代の無住『沙石集』にも見ることができ

三三 宣長と『沙石集』

『沙石集』は、後世よく読まれて江戸期には刊本の盛行を見たが、抄出本も多く説教の種本ともされた。宣長にとつて『沙石集』は、『本居宣長随筆』で二箇所で長文に亘って抄出され、『古事記伝』では古語の注釈に際して引用される少数の仏書の一つであり、成年期以降に精読した数少ない仏書の一つであった。『沙石集』には「止観」という語が多く登場し、無住が『摩訶止観』に親しんでいたことを示す⁽¹⁴⁾。宣長の抄出文にはないが『沙石集』の次の言葉が重要である。

生死ノ長夜明ザル事、心外ニ法ヲ見テ、妄境ノ為ニ転ゼラル、故也。心外ニ法ヲ見ズハ、法即チ心、心則チ法ニシテ、生死出ベシト云ヘリ。．．．万法唯識、諸境唯心ノ謂是也。三界唯一心、心外無別法等ノ経文ヨリ、此旨起レリ。(『日本古典文学大系沙石集』岩波書店・八二〜八三頁、一三八頁)⁽¹⁵⁾

宣長は『本居宣長随筆』で、「一切唯心造、．．．華嚴経云、三界唯心、心外無別法、又曰、一切唯心造」と記すように「三界唯心」という思想に着目しており、『沙石集』からもこの思想を知ったと考えられる。華嚴思想における「三界唯心」とは、世界と心は一体であり、世界はそのまま心であることである。すなわち「法即チ心、心則

「法」なのである。無住が言うように華嚴經の「三界唯心」の考え方を引き継ぐ唯識派はそれを「万法唯識」と表現する。唯識派は認識対象としての外的事物の存在を否定し、存在するのは唯だ識のみであり、外的事物と見えるものは識が変化したものであるとする。外界の認識対象は通常、言葉によって認識されるが、唯識派は言葉によって認識することは認識対象を外化して、外界に存在するものとして実体化すると見る。したがって唯識派によれば外界の事物は虚妄である。宣長はそのような「三界唯心・万法唯識」の思想を自らの学問に応用した⁽¹⁷⁾。だがその思想を根本の所で否定する形で応用したのである。

四・宣長の哲学的思考

心と事と言語の関係は『古事記伝』で次のように語られる。

抑意^{コトバ}と事^{コトバ}と言とは、みな相称^{アヒカガ}へる物にして、上代^{ウツ}は、意も事も言も上代^{ウツ}、後代^{ウツ}は、意も事も言も後代^{ウツ}、漢国^{カラム}は、意も事も言も漢国なるを・・・此記^ヘは、いさ、かもさかしらを加^アへずて、古^ヘより云^ヒ伝^ハたるま、に記^ヘされたれば、その意も事も言も相称^{アヒカガ}て、皆上代^{ウツ}の実^{マコト}なり、
(全集第九卷六頁)

「意と事と言とは相称へる物」とは、心がそれ自体として存在し言語でそれを表現するのではなく、言語表現が心であり心と言語は一体であること、また事物がそれ自体で存在し言語でそれを表現するのではなく、事物の存在とその言語表現は同時且つ一体であること、そして心と事物は一体だとすることである。その考え方は唯識思想に近

く、そのままの応用のように見える。だが宣長にとって唯識派とは異なつて事物は識の変化した物、つまり識によって作り出された物ではなく、上代人の目の前に事実として存在するものである。この点において宣長は唯識派の考え方を否定しその思想から離れる。宣長にとつて心と事物が一体であるとは、外界の事物の現れ方、つまり事物の見え方・感じ方が心だとすることであり、事物は外界に実在する。

このように『古事記』の古伝説を語る言葉は、心と事と言語が一体不可分であるために、そこに記された事柄は上代の事実であった。つまり上代人は見たまま聞いたままを言葉に声にしたのであり、言葉にした事物、たとえば高天原は事実として実在した。言い換えれば『古事記』の世界は、上代人の心と言語から独立した客観的世界ではなく、上代人が見、聞き、感じた世界であり、上代人の心のあり様を表現する。この心と事と言語の関係の捉え方は、『古事記伝』の最も重要な考え方であり、浩瀚な注釈はこの上になされる。

しかし宣長の哲学的思考は、江戸当時の上代の古伝説に関する常識とはかけ離れていた。江戸期の知識人の間では古伝説は荒唐無稽なものとされ、宣長の哲学的思考は理解されなかつた。宣長は高天原や海神宮の実在を信じない知識人たちを次のように批判する。

世の物知人^{モノシロト}みな漢籍^{カラフミ}意^{コトバ}に泥^{ナツ}み溺^{オボ}れて、
あることを信^{ウケ}ざるは、いと愚^{オロカ}なり、
海神^{ワタケカミ}の宮は、海の底にある国なり、
しき人の心には水中に宮室^{ミヤヤ}などのあるべき理^リなし、
・・・
(全集第九卷一三三頁)
(全集第十卷一四五頁)

このように古伝説が事実であることを語る宣長の語り口は、明治になって西洋の学問が入ってきたからは宣長の偏狭な皇国主義と見なされ、批判された。その状況は今日においても基本的には変わらない。しかし宣長は後世の視点からでなく、上代人の視点に立つて古伝説を事実であると受けとめることによって初めて上代人を真に理解することができると考えた。心と事と言語は一体不可分であり、古語は上代の事実そのものなのである。したがって古語を明らかにすれば上代人のありさま心ばえを知ることができる。

唯いく度も古語を考へ明らめて、古の手ぶりをよく知こそ、
学問の要とは 有べかりけれ、凡て人のありさま心ばへは、言語
のさまもて、おしはからる、物にしあれば、上代の万の事も、そ
のかみの言語をよく明らめさとりてこそ、知べき物なりけれ、

(全集第九卷三三頁)

ところで宣長は「三界唯心」を釈教歌からも理解したと考えられる。宣長の蔵書目録に載る数少ない仏書の一つに『説法用歌集諺註』がある。それは元禄時代に編集された注釈付きの歌集であり、説教手引書として使用された。全十巻の内、巻一から巻五が明治になって復刻され、四二八首の内十三首の注釈に三界唯心的な考え方が述べられる。

はかなくもみよの仏と思ひける

我身ひとつにありとすらずて 教長

題華嚴經意とは則経曰三界唯心、心外無別法、心仏及衆生是三
無差別、読之也、文意三界已界仏界衆生界也、同経云応観法

本居宣長の哲学的思考と仏教教養(清田政秋)

界性一切唯心造上、云々

(『説法用歌集諺註』前篇・卷一・十八頁)

『説法用歌集諺註』の内容から、江戸期には三界唯心の考え方はよく知られ、それは当時の知識人にとって仏教常識に属するものだったのではないかと考えられる。宣長も『説法用歌集諺註』からそれを知ることができた。ここにも宣長の仏教教養が現れている。

窪田空穂はその俊成論で、心は即ち物であり、同時に物は即ち心であるとすることは、仏教の側からは常識に過ぎず、当時の仏教教養から言えば説明を要しないものであったが、俊成がそれを歌と結び付けた点に重要な意義があったと言う。同じように宣長の仏教教養も江戸当時のレベルから見れば常識的なものであったと考えられるが、宣長は仏教の哲学的思考を仏教の外で、難解な仏教語を使わずに『古事記』注釈に結び付け、過去の歴史の中で実際に生きていた人々の現実のあり様に適用した点に大きな意義と獨創性があったのである。

おわりに

宣長の学問は仏教思想とは関連性がないとする従来の宣長像に対して、本稿は仏教思想、特に『摩訶止観』に表現された仏教の基本的思想が宣長の哲学的思考に大きな影響を与えたことを明らかにし、新しい宣長像の構築を目指そうとした。だが『摩訶止観』の影響が、藤原俊成を始めとする中世歌人たちの歌論の中にどのように具体的に現れているか、それを宣長がどのように受け止めたと考えられるかを明らかにする。

かにすることができなかった。今後の研究課題としたい。

注

- (1) 筆者は「契沖の仏教言語思想と本居宣長―心と事と言語の関係を廻って―」(『日本思想史学』第五〇号・二〇一八)と「本居宣長の言語観と俱舎・唯識思想」(『比較思想研究』第四五号・二〇一九)で、「相称へる」が仏教語に由来することを論じた。
- (2) 『国訳一切経 毘曇部七』三〇四〜三〇五頁。仏典からの引用は読み易さの点から「大正蔵」の漢文ではなく「国訳一切経」の訓読文とした。
- (3) 『国訳一切経 毘曇部九』一〇〇〇頁。
- (4) 最初の引用文は『万葉代匠記・岩波版契沖全集第一卷一九四頁、次の二つの引用文は『和字正濫鈔・全集第十卷一〇九頁。』
- (5) 前掲の『日本思想史学』掲載の筆者論文を参照。
- (6) 宣長に仏教批判の纏まった著作はないが『玉勝間』や『直毘靈』等で断片的にそれが語られる。宣長の仏教批判についての研究に、高木宗監『本居宣長と仏教』(桜楓社・一九八四)、袴谷憲昭「宣長の仏教批判雑考」及び「宣長の両部神道批判」(何れも『本覚思想批判』所収・大蔵出版・一九八九)等がある。
- (7) 中根道幸「宣長さん―伊勢人の仕事―」(和泉書院・二〇〇二)は、宣長が実際に手にした書は約二五〇書だとする(同書四九頁)。
- (8) 『法然上人絵伝』に「四教五時の廢立鏡をかけ、三観一心の妙理、玉をみがく」(岩波文庫・上二五頁)という言葉がある。
- (9) 稲村栄一「訓注明月記」第五卷(二〇〇二・松江今井書店)参照。
- (10) 『摩訶止観』の思想については、新田雅章『摩訶止観』(佛典講座二五) (大蔵出版・一九八九)、菅野博史「一念三千とは何か」(第三文芸社・一九九二)、池田魯参『摩訶止観』を読む(春秋社・二〇一七)等を参照。
- (11) 宣長は京都から帰郷して半年後に起稿した『安波礼弁』(『本居宣長

全集』第四卷)で俊成の「恣せずは」の歌について記すが、この歌は京都時代に師の堀景山から教わったものであり、景山の「不尽言」にある。宣長は『本居宣長随筆』の京都時代執筆部分で「不尽言」を抄出し、この歌を記している。

(12) 藤平春男「新古今歌風の形成」(明治書院・一九六九)一四九頁参照。

(13) 『日本歌学大系』第三卷(風間書房・一九六三)七三〜八二頁。

(14) 『古事記伝』で引用される仏典・仏書は、『華嚴経』『大智度論』『十王経』『翻訳名義集』『扶桑略記』『日本霊異記』『今昔物語』『沙石集』である。

(15) 『日本古典文学大系沙石集』(岩波書店)の解説で渡邊綱也氏は、無住の学識の中心は、宗鏡録・大智度論・摩訶止観であったのではないかと述べている。

(16) 『沙石集』には多くの諸本があり、宣長が手にしたものがどの版本かは定かではない。だが何れの版からもここに引用した思想は読み取れると想定される。

(17) 前掲の『比較思想研究』掲載の筆者論文を参照。

付記

本稿は、日本宗教学会第八〇回学術大会におけるオンライン発表(二〇二二年九月)をもとに、大幅に加筆したものである。

(せいた まさあき 佛教大学総合研究所特別研究員)